

ことばの不思議と学習の楽しみ

小坂光一

0 序

「ことば」の構造は実に複雑である。その「ことば」を使って情報をやり取りする場合、理論的にはかなりの数の解釈の可能性が考えられる。しかし、発信側はそこから1つを選び、受信側も通常はそれと同じ1つを選ぶ。こうすることによりコミュニケーションが成立する。そして、このような、一見したところ偶然に近いと思われる「一致」が日常的には常に生じる。これが「ことば」の不思議である。そしてここから、ことばを学習する楽しみも生じる。発信側の意図と受信側の解釈が一致しない場合もときにはある。これが「誤解」である。本稿では公開講座での内容にそって、母語話者間、異言語話者間のコミュニケーションについて考えてみたい。¹ なお、「異言語間コミュニケーション」という表現は、本稿では「母語を異とする者どおしがいずれか一方の言語使って行うコミュニケーション」を意味している。

1 ことばの魔力

我々は食物を食べて生きているのと同じようにことばを使って生活している。特に用事のない時でも会話ということばのやりとりを楽しんだり、読書をしたり、もはやことばなしでは生きていけないと言っても言いすぎではない。

物語りのあらすじ自体は別にたいしたことでないのに、作者のことばの選び方、こと

¹ 本稿は2007年の国際言語文化研究科公開講座で話した内容に加筆したものであり、既発表の論文の内容をコミュニケーションの観点からまとめ直したものに過ぎない。

ばに対する感覚の鋭さの故に優れた作品にまで高められている場合も少なくないし、例えば大宰治の作品を読んでいて、それが共通語で書かれているにもかかわらず津軽(弁)の雰囲気はひしひしと感じられたりする。ことばはまさしく生き物であると言える。

さて、この、普段何気なく使っていることばも、よく観察してみると不思議に感じる程の魔力を持っていることに気付く。例えば「お金ありますか」と「お金あるんですか」は別に大した違いがあるようには思われなくてもいいが、日本人であればきちんと使い分けている。お金を借りに行って「お金あるんですか」などとは、それが冗談ででもない限り言わない。それでいて、「お金ありますか」と「お金あるんですか」の違いをきちんと説明せよと言われれば、通常の人には返答に困る。ドイツ語に関しても同様のことが言える。

- (1a) お金ありますか。
- (1b) Haben Sie Geld?
- (2a) お金ある**ん**ですか？
- (2b) Haben Sie **denn** Geld?

このように、決定疑問文の場合は「の」(„denn“)の使用・不使用を区別しないとコミュニケーションに障害が生じる。どちらの文も言語的には完全に正しいだけに、コミュニケーション上の効果だけが表面化するので、なおやっかいである。一方、補足疑問文の場合は厳密な区別を必要としない。「の」(„denn“)を常に使用することができる。²

- (3a) どこへ行く**の**？
- (3b) Wohin gehst du **denn**?

また、講演や演説を聞いていて、話し手が「我々は・・・」などと言ったとき、この曖昧なことばである「我々」という語が誰を指すのか、聞き手である自分をも含むのか含まないのか、きちんと聞き分けている。³

多くの単語はそれぞれ一つの意味しか持っていないのではなくて、沢山の意味を持っているということは、試しに国語辞典で一つの単語を引いてみればわかるであろう。大抵は一つの単語に対して複数の意味(概念)が書かれてある。話し手はその複数の

² 「の」と„denn“に関しては Kosaka(1989)、小坂(2002)、S. 103ff 等を参照。

³ アイヌ語では相手を含まない「我々」と相手を含む「我々」が言語的に区別される。具体的に言えば、両者の間には動詞の人称変化の相違がある。

意味の中から一つを選んでそのことばを使い、聞き手もその複数の中から一つを選んで聞き取る。従って、話し手の選んだ一つと聞き手の選んだ一つの組合わせの可能性は理論上はものすごく多くなる。その多くの可能性の中から、話し手の選んだ一つと聞き手の選んだ一つが一致しなければコミュニケーションは成り立たない。

そういうことを1つ1つの単語や意味構造に関して考えていくと、よほどの偶然でもない限りコミュニケーションなど成り立たないかのような印象を受けるが、実生活においてはその反対で、偶然でない限り対応関係が外れることがなく、コミュニケーションが成り立っている。つまり、人間というものは、母語を同じくする者同士においては、無数と思われる意味構造の中から非常に正確にその一つを選び出すという作業を日常何の苦労もなく行なっているのである。これこそまさしく、ことばの偉大さであり、ことばの魔力でもある。

この、話し手と聞き手の意味の対応関係が何らかの拍子に外れると、誤解という現象が生じるし、また、意図的にこの対応関係を外し、かつ、第三者にはこの外れ方が明確である場合には落語とか小噺のような一つの芸術すら誕生することになる。

意味構造の違いの1つの例として「命題否定」と「述語否定」について述べる。⁴

- (4) 研究所は、真冬は丸四時間も太陽が顔を出さない極北の地にある。
(2001年1月8日付『朝日新聞』の天声人語)
- (5) 中国の香酢はすべて同じではない。．．． やずや、やずや。
(テレビのコマーシャル)
- (6) Hat das nicht geschmeckt? – Nein, nein! (私の1986年の失敗)
たか? それ ない おいしい – 否、否
- (7) とび出すな、車は急に止まれない。(交通標語)

(4)の場合、「真冬」、「極北の地」というキーワードがあるため、一義的に(下記表の1のように)解釈されるだろうと思っていたが、実際はそうではなかった。筆者の授業を受けている学生に質問したところ、次の2つの解釈に分かれた。

⁴ 述語否定と命題否定に関する詳しい考察については小坂(1997)、小坂(2002)S.139ff参照。また、命題否定の成立過程に関しては小坂(2003)参照。ここでは命題否定を助詞の前方移動との関連で論じている。本稿でも後にこの点に触れる。

	太陽が顔を出す(明るい)時間	太陽が顔を出さない(暗い)時間
1	4時間	(20時間)
2	(20時間)	4時間

「太陽が顔を出さない時間が4時間」であるというのが述語否定の解釈、「太陽が顔を出す時間が4時間」であるというのが命題否定の解釈である。

(4a) 太陽がまる4時間[顔を出さない] (述語否定)

(4b) [太陽がまる4時間顔を出す]ない (命題否定)

日本語では命題否定が多く用いられる。にもかかわらず、筆者の授業を受けた上述の学生のうち、外国人留学生のほとんどは命題否定の解釈をした。解釈が分かれたのはむしろ日本人学生の方であった。これは予想外であった。

(5)も二義的であるが、これは2つの解釈の可能性を意図的に残しているのかもしれない。

(5a) 中国の香酢はすべて[同じではない] (=中国の香酢は全部異なる) (述語否定)

(5b) [中国の香酢はすべて同じだ]ではない (=中国の香酢には異なるものもある) (命題否定)

(6)はドイツ語の文であり、質問はレストランのウェイトレスによるもの、返答は筆者によるものである。前文は私が料理を半分残したの見てウェイトレスが言ったせりふであるが、筆者には「おいしくなかった」と答えるつもりは毛頭なかったので、„Doch!“と答えるべきであった。だが、ドイツ到着の翌日だったため、筆者には(日本語の)命題否定の感覚がまだ残っており、このように答えてしまったのである。すなわち、筆者は、与えられた命題[おいしくなかった]を否定しなければならないと考えたのである。筆者の答 („Nein, nein“)は私の意図に反して述語否定になるので、「本当にまずかった」という意味になってしまう。しかし、このウェイトレスには私の言おうとしたことが伝わったらしく、にこにこしていた。コミュニケーションには言語そのものの以外の要素が多く関与している証拠であるとも言える。⁵

⁵ 学術研究書ではないので参考文献としては挙げなかったが、コミュニケーションに言語そのものの以外の要素が大きくかかわっていることを述べたものとして竹内一郎(2005):『人は見た目が9

(7)は1970年代に許容文か悪文かをめぐって議論の対象になった文である。

(7a) 車は急に[止まらない] (=「ブレーキが故障した」など) (述語否定)

(7b) 車は[急に止まる]れない (「急停止できない」) (命題否定)

(7)を悪文とした人は「急に**は**」のように助詞「は」を入れるべきだと主張する。

(7c) とび出すな、車は急に**は**止まらない。

確かに助詞「は」には命題否定の解釈を強いる機能がある。

(8a) 全員**が**来なかった。(=来たのは0人) (述語否定)

(8b) 全員**は**来なかった。(=来なかった人がいる) (命題否定)

「は」を使用することにより命題否定に傾くのは何に起因するだろうか。「は」の機能の1つとして「対比」機能が挙げられる。問題は「何と何を対比させるか」である。

(9) 昨日**は**大雨が降ったが、今日**は**晴天だ。

(9)の場合は「昨日」と「今日」が対比されていると解釈しても特に問題はない。次の(10)の場合も、「毎日」と「ときどき」の対比であると解釈することが不可能ではないが、いささか不自然である。「毎日」と「ときどき」を対比させる必然性がないからである。

(10) 毎日大学に行きますか。

—毎日**は**行きませんが、ときどき**は**行きます。

この場合はむしろ、「毎日行く」と「ときどき行く」が対比されている(命題と命題が対比されている)と解釈する方が自然であろう。筆者はこの現象を「助詞の前方移動」の観点から説明した。⁶ すなわち、「毎日**は**行きません」と「ときどき**は**行きます」の成立過程を次のように考えた。

割』(新潮新書)がある。この本の中で著者はアメリカの心理学者アルバート・マレービアン博士の実験結果を紹介している。その実験結果によると、人が他人から受け取る情報の割合は、顔の表情からが55%、声の質(高低)、大きさ、テンポからが38%であり、話す言葉の内容からは7%に過ぎない、ということになるようだ。

⁶ 助詞の前方移動に関して詳しくは小坂(2003)参照。なお、この「助詞の前方移動」という考えは久野(1973)からヒントを得たものである。

(P_1 と P_2 の対比)

[毎日行く] P_1 は成立・存在しない が [ときどき行く] P_2 は成立・存在する⁷

↓

[毎日行き]はしない が [ときどき行き]はする

↓

(「は」の前方移動)

[毎日**は**行かない] が [ときどき**は**行く]

(8a)の述語否定と(8b)の命題否定の意味構造の違いは次のように示すことができる。

(8a) 全員**が**来なかった。(述語否定)

全員が[来なかった]

(8b) 全員**は**来なかった。(命題否定)

[全員が来る]**は**成立・存在しなかった

↓

[全員が来]**は**しなかった

↓

(「は」の前方移動)

全員が**は**来なかった

↓

(格助詞「が」の消去)

全員**は**来なかった

(7c)もこの観点から、例えば次のように説明できる。

車は⁸[[急に止まる]れる]**は**成立・存在しない (車は[[ゆっくり止まる]れる]**は**成立・存在する)

↓

⁷ ここでは問題を複雑にしないために、「成立」と「存在」を区別せずに、併記することにする。「成立」と「存在」について詳しくは小坂(2002)参照。

⁸ 「テーマ(話題)」を表示する「は」(この例の場合は「車**は**」の「は」)は「対比」を表す「は」と別に処理する必要がある。この処理に関しては本稿では触れない。

車は[[急に止ま]れ]はしない

↓

(「は」の前方移動)

車は急には止まらない

このように、命題否定と「は」の関係は助詞の前方移動という観点から説明できるように思われる。

次の(11)は2004年のNHK大河ドラマ『新選組』(作・脚本:三谷幸喜)の中で用いられたせりふで、いまだに筆者の記憶に残っている文である。「(酒を)飲んで帰りませんか」という近藤勇の誘いに対して芹沢鴨が答えたせりふである。

(11) 酒は飲む。だがお前とは飲まん。(2004年4月25日放映)

「酒」と「お前と」の対比であるという説明は不自然であるが、[「酒を飲む」 P_1 と「お前と飲む」 P_2 の対比]+[助詞の前方移動]の観点をを用いると説明しやすくなる。⁹

(P_1 と P_2 の対比)

[酒を飲む] P_1 は成立・存在する だが [お前と飲む] P_2 は成立・存在しない

↓

[酒を飲み]はする だが [お前と飲み]はしない

↓

(「は」の前方移動)

酒は飲む だが お前とは飲まない

⁹ 助詞の前方移動の現象は係助詞「は」に限ったものではない。よく見られるものとして係助詞「も」、副助詞「ばかり」などがある。

あいつは嘘ばかりついている。

動詞「つく」の目的語は「嘘」以外考えられない。「嘘」以外に「つく」ものがないのに「ばかり」が用いられるのは、次のような成立過程によるものと思われる。

① あいつは嘘をついているばかりだ→② あいつは嘘をついてばかりいる→③ あいつは嘘ばかりついている

この場合、助詞の前方移動は③の段階で終了する。すなわち、

④ *あいつばかり嘘をついている

までには至らない。「テーマ助詞」(この例の場合は「あいつは」の「は」)との関係については今後さらに考察する必要がある。

2 ことばの相対性

ことばの相対性と言うのは、簡単に言えば、「言語によって異なる性質」である。

地球上にはものすごく多くの言語があり、それぞれがお互いに異なっているということとは誰にもわかることで、今更言うまでもない。まず、音声、つまり音が違う。また、音と意味とのつながり方も言語によって異なる。

しかし、ここではもっと内的な違いを見てみたいと思う。例えば、日本語では外国へ行くことを「海外渡航」と言う。しかし、ドイツとかフランスとかといったヨーロッパの国では、外国へ行くことを「海外渡航」とは言わない。陸続きの国では必ずしも「外国＝海外」ではないからである。「海外渡航」などという語は、「外国はすべて海外である」という日本の特殊事情から発生している。

次の表は、ドイツ語と日本語の単語の意味概念における対応関係をパターン化したものである。

	ドイツ語	日本語
1	Computer	コンピュータ
2	Bruder	兄 ----- 弟
3	Herr ----- Frau ----- (Fräulein)さん、.....君、.....様、殿、.....先生 usw.
4	Sünde ----- -----	----- ----- 罪
5	∅	わび・さび

- 1 : ほぼ完全に対応するタイプ
 2, 3 : 分割の仕方が異なるタイプ
 4 : 概念にずれがあるタイプ
 5 : 対応する語(概念)が一方において存在しないタイプ

1のタイプの場合は翻訳・通訳が比較的楽であるが、5のタイプの場合は翻訳・通訳がほとんど不可能である。

2のタイプの場合はドイツ語から日本語への翻訳・通訳がむずかしく、3のタイプの

場合は日本語からドイツ語への翻訳・通訳がむずかしい。2の場合は年齢関係、3の場合は男女差、社会的関係などの背景知識が必要である。しかし、これは自分以外の人間の発話・文章を翻訳・通訳する場合の問題であり、日常のコミュニケーションの場合は、特定のコンテキストのもとでいずれかの1言語を使って行われるのが普通であるから、通常は大きな問題とならない。語を置き換える必要もないし、背景情報もコミュニケーションの過程において明らかになるのが普通だからである。

タイプ4の場合は翻訳・通訳そのものはむずかしくないが、概念のずれは避けられない。

また、日本語では、「日本語以外の言語」を「外国語」と言う。「外国語」に相当するドイツ語は日常的な使用場面では„Fremdsprache“である(と考えられる)が、これら2語も厳密な意味での対応関係にない。„Fremdsprache“は「nativeでない言語」、すなわち「非母語」を指すのであって、必ずしも「外国」語である必要はない。この理由から、筆者はまさに日本国内において1つの困難にぶつかっている。筆者はアイヌ語の授業も担当しているが、アイヌ語は言語学的に見て間違いなく「日本語」ではない。しかしながら、日本語を母語とし、日本国籍を有して日本に住んでいる筆者から見た場合、アイヌ語は「外国」語でもない。アイヌ語は筆者にとってまさしく„Fremdsprache“なのであるが、その„Fremdsprache“に相応する日本語の表現がない。よって、アイヌ語をどう表現したらいいかで苦労している。あえて言えば「非母語」であろうが、誰にでもわかる日常的な語ではない。

このように、言語によって外界を分割する仕方が異なるということはその言語に特有の「思想」があるということを意味する。こういう思想は単なる個人のものではなくて、母語を共有する言語団体全体に共通するものであり、単なる音声の違いではなくて言語間における世界観の違いであるということができる。

我々は植物を見て、これは野菜だとか雑草だとか果物だとか言う。しかし、自然の世界では雑草だとか野菜だとかの区別はなく、個々の植物が生えているだけである。それを人間が勝手に、自分たちに都合の悪いものには「雑草」と名付け、日常世界において食べ物として役立つものを「野菜」、「果物」のように命名している。つまり、自然界がことばによって分類されたり分割されたりしていることになる。

上述したように、この分割の仕方、命名の仕方は言語によって異なると言っても過言ではないが、さらに細かく見ていくと、母語が同じであっても、職業の違い、自然環境の違い、方言などによって分割の仕方が異なる場合がある。

3 ことばの普遍性

大抵の人は(学校などで)一つや二つ、外国語を習った経験があると思われる。ある程度以上の年輩の人の場合にはまず文法を習って、そのあと、何かを読む、あるいは会話を習うというプロセスを踏んでいると思われるし、比較的若い人の場合にはLL教室などを使ってある一定のパターンを練習するといった経験を踏んでいるかもしれない。

いずれの場合も文法的に正しい文を作る練習はしているはずである。例えば、「あなたは英語を話すことができますか」という内容の問いに対して「はい、私は英語を話すことができます」と答えるような練習である。こういう練習はもちろんある意味で非常によい練習になるし、また役にも立つ。しかし、あまりに文法的な、あまりに型にはまったことばの使い方をするとこっけいになる。むしろ、文法的には正しいけれども実際のことばの運用という意味では間違いであるという場合もある。

例えば、道を歩いているときに通行人に駅へ行く道をたずねられたとする。

- (1) すみません。駅へいく道を教えてくださいませんか。
- (2a) はい、駅へ行く道をお教えすることができますよ
- (2b) ええ、いいですよ。

(1)に対して(2a)、あるいはもっと簡単に(2b)のように答えたとしたらどうだろうか。この答え方は文法的には完璧で非の打ち所がない。しかし、会話は全く成立していない。言語の運用、言語の働きという観点から見た場合、この答え方は間違いであるとさえ言える。会話が英語やドイツ語など、他の言語で行なわれたとしても同様のことが言える。通行人のことばは疑問文を使った質問形式をとっている。そういう場合は「イエス」、「ノー」ではっきりと反応するのが教科書通りの答え方であるから、(2a)や(2b)はその意味では完全に正しい答え方である。

しかし、通行人は疑問文を用いてはいるが、別に「あなたが道を教えることができるか否か」を聞いているわけではなくて、むしろ「道を教えて下さい」と依頼しているのであるから、それなりの反応の仕方が必要となる。このように、文法構造という点から見ると言語ごとに相違があると言えるが、文の機能、働きという観点に立つと、多くの言語に共通した現象が見られる。これをことばの普遍性と呼ぼう。

いろいろな言語に共通した現象というのは他にもたくさんある。重要な部分にアクセントをおくという現象は多くの言語に共通している。さらに、不要な部分を省く省エネ傾向、否定文にするときは複雑な文を使わない傾向、などもある。次の(3a)はまともな文であるが、(3b)のような文はどの言語においても実用性に乏しい。

(3a) あした私は学会に出席するために朝8時の新幹線で東京へ行きます。

(3b) *あした私は学会に出席するために朝8時の新幹線で東京へ行きません。

外国語を使う場合、日本語で許されるから外国語においても大丈夫だろうと考えるのは少々危険であるが、日本語でおかしいんだから外国語でもおかしいんじゃないだろうかということはいったん考えてみる必要がある。

4 言語の学習

ことばを楽しむ。この醍醐味は何といっても新しい言語の学習にある。しかし、ことば、特に外国語をなかなか思うように覚えられないというのが多くの人に共通した悩みであるし、外国語を教える側にとっても、いかに効果的に教えるかが最大の課題である。

我々が外国語を学ぶ目的には、もちろん、学校の必修課目だからということもあり得るが、他にも例えば、耳と口で、あるいは文字を使って、その言語を使っている相手と直接コミュニケーションを行なうためとか、外国語で書かれた物を読むためとか、あるいは少し知的な作業として、外国語と母語の言語構造上の相関性を知るためなど、人によってさまざまである。外国語を学ぼうとする人がどんな目的を持っていようと、それはその人の勝手であり、他人の関知すべきことではない。しかし、その人にどんな目的があろうとも、まずその言語を習得することが先決である。

将来読むことだけに重点をおくにせよ、会話のような表現力に重点をおくにせよ、初期の段階では、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」という4つの能力を総合的に練習する必要がある。

「聞く」と「話す」は音を媒介にしているという点で共通しており、「読む」と「書く」には文字を媒体にしているという共通点がある。一方、「聞く」と「読む」は受容、受け入れという点で共通しており、「話す」と「書く」には発表、表現という共通点がある。つまり、この4つの能力はお互いに微妙にからみあって語感を形成しているのであり、4つのうちの1つが単独で発展する訳ではない。故に、あとでそのどれかに学習上の焦点を当てることになるにしても、初めの段階では4つとも練習する必要がある。

大人が外国語を勉強するのだから、子供と違って知的な喜びがなければいけないとよく言われる。確かにその通りではある。でもそれは、必ずしもむずかしいことをやらなければいけないということではない。どんな幼稚な内容でも、自分の表現したいことを表現できるようになり、相手の表現していることが理解できるようになれば、知的喜び

は感じられるであろう。新しい言語を学ぶということは所詮幼稚な事から始めなければならないということは肝に銘じておく必要があるだろう。物を覚える速度には年齢差も関係する。大人に子供の真似はできない。従って、外国語を学ぶ方法も大人と子供で違うのはしかたがないと思われる。しかし、子供が優れた覚え方を持っているのであれば、大人がそれを見習って悪いはずはない。ことばの学習は「間違い」、「訂正」、「発見」の繰り返しである。

「意味」と「形態」の関係は恣意的である。それは言語により「形態」が異なることからわかる。コミュニケーションというのは「意味」の伝達、「意味」のやり取りであると考えられがちであるが、私見ではコミュニケーションというのはむしろ「形態」のやり取りであると考えの方がいいように思う。

例えば、「酒を持って来い」と言われた人がどうやって「酒」を持っていくか。「酒」そのものを単独で持っていくことはできない。手段として考えられるのは「酒」の入った「容器」、すなわち、一升瓶や徳利などを持って行くことのみである。「ことば」というものは「中味」(=「意味」)の入った「入れ物」であると言うことができる。「中味」は「入れ物」に入れてしまえば入れ物の形状などに影響される。この点は本稿の第2章「ことばの相対性」で述べたこととも関連する。関口(1960)ではこの入れ物に当る部分に「意味形態」という語を当て、この「意味形態」の重要性を説いている。「意味」そのものに形がない以上、実際の表現やコミュニケーションでは「意味形態」が重要になるわけである。

水に方円無し、器に方円あるのみ。器の方円を称して意味形態と呼んでもよいではないか。(関口(1960) S. 24)

ことばの学習において重要なのはこの「入れ物」の構築であろう。関口(1960)の著者関口存男はかつてラジオのドイツ語講座を担当していたが、そこにおいて次のように述べている。

…。人がぺらぺらと言ったら、その通りぺらぺらと言える。意味がわからなくても。そういう練習をしますと、それが一番よろしいんです。……。もう意味なんてことはその次です。その次の次の次です。…¹⁰

¹⁰ 筆者はたまたまその放送の録音テープ(コピー)を持っているが、それが何年何月何日のものであるかは特定できない。関口は1958年(昭和33年)に他界しているから、当然それ以前であることは間違いない。1980年頃までのドイツ語教育では文法・訳読授業が主流だったことを考えると、この時代にこのような「先進的」な発言がなされていたことは驚くに値する。なお、関口存男著『冠詞』は全3巻からなり、著者(関口)の没後に出版されたものである。

筆者もドイツ語教育においてこの考え方を応用し、意味形態重視型授業を行っている(つもりである)が、いずれにせよ、言語学習は苦痛の種としてではなく、楽しみの源として行う方が効果的である。学習者に苦痛を与える教授法は良い教授法とは言えない。¹¹ 間違いを禁止するような教授法は最悪だ。「外国語の運用は完璧にはなり得ない」と考える方がむしろ効果的だと思われる。教える側から見た場合、言語教育の初期の段階において重要なことは「知識を与える」ことや「理解させる」ことではなく、先ずは「当該言語ができるようにさせる」ことである。さらに言わせてもらえば、「当該言語ができるようにさせる」ことよりもさらに重要なことは、「当該言語ができるようになる/なったと思わせる」ことである。例えそれが学習者の「錯覚」であってもかまわない。「できるようになる/なった」という自信がモチベーションの喚起とその後の飛躍的な上達につながる。逆に、「自信を失う」ことはその後のモチベーションの喪失、学習の中断・中止につながる可能性がある。

参考文献

- 久野 暉(1973): 『日本文法研究』、東京
- Kosaka, K. (1989): „Abtönungspartikel *denn* und Satznominalisierung“, in Weydt, H. (Hrsg.): *Sprechen mit Partikeln*, Berlin-West
- 小坂光一(1997): 「命題否定と否定命題」、名古屋大学言語文化研究会『ことばの科学』第10号
- 小坂光一(2002): 『「成立」と「存在」』(動詞句を中心とした日独語対照研究)、同学社
- 小坂光一(2003): 「助詞の前方移動—命題否定と『WHモ』—」、名古屋大学言語文化研究会『ことばの科学』第16号
- 関口存男(1960) 『冠詞』第一巻、東京

¹¹ 公開講座では言語教授法の1つとして TPR(=Total Physical Response、全身反応教授法)を紹介した。具体的には筆者が収録したビデオを用いて、TPR を使ったトルコ語の授業を紹介した。